

# 上田高等学校 創立100周年記念

上田高等学校同窓会  
支那信支部

発行人：小林茂昭  
上田高等学校同窓会  
中南信支部事務局  
連絡先：0263-85-1599

## 御挨拶

上田高等学校同窓会 中南信支部

支部長 小林茂昭（五四期）



上田高等学校同窓会 中南信支部会報を発刊するに当たりご挨拶申し上げます。

本支部の発足は平成六年にさかのぼります。当時の上田高校同窓会長金子八郎氏、理事小林茂氏、成沢一之氏等幹部の方々のお勧めで、数回の準備幹事会のあと、第一回の中南信支部発会式が行なわれました。会員のリストアップをしたところ、二五〇名の上

田中学ならびに高校出身者が中信、南信地方におられました。支部の新設はつとに上田高校設立一〇〇周年記念を視野にいったものと窺えました。我々松本地方に住むものにとつては、母校の上田地方に住む人たちが、東京―長野という旧信越線沿線に視点があつた。中南信地方に注目があつた。一抹の寂しさを感じていたため、この中南信支部の設立は、母校に対する青春の熱い思いを再び湧きおこしてくるものでした。

以来、毎年秋に年次総会を開いて参りました。毎回、校長先生ならびに同窓会長他理事の方々、そして、関東、関西、長野支部長さん方々が来賓として出席され盛会で楽しい会となつてまいりました。特に当時より、何回もご参席

いただいてきた、依田、細川校長先生、同窓会からの金子、水野、甲田、小林（茂）様、支部からの来賓小山（長野）、吉池（関西）様には、激励を受け勇気づけられました。

中南信支部の役員は当初、副支部長として舟田、武村氏に、幹事長として成沢（文）氏に御苦労をいただきました。平成九年に役員改選に際して、私が、教授職に加えてオリンピックの医事責任者として多忙もあつて、丁度蟻ヶ崎高校長を定年退職になつた舟田先生にお願いしました。が、受けていただけませんでした。間もなく先生は、松本市教育長となられました。病に倒れ残念ながら逝去されました。現在、副支部長を武村、中沢、林氏にお願いし、幹事長に久保田氏そして幹事に大口、小池、伊藤、金井、師田の諸氏が担当されております。

支部の総会は年一回であります。が、幹事会は数回開き情報交換と総会の準備や諸計画を練っているほか、懇親のゴルフ会等を行なっております。

最近年次総会の内容がややマンネリとなつてきているとの認識が幹事会であり、新たな企画が検討されました。そして

最近、総会にさきだつて講演会が毎年おこなわれていきます。テーマとしては、“オリンピックと救急医療”（奥寺信州大学医学部 助教授）、“ベラルーシの原発事故後遺症”（小池健一信州大学医学部 助教授）、“マスメディアの現状と展望”（武村長野放送松本支社長）、“道祖神につかれて”（石田益雄氏）等です。また会報の企画は、関西支部を範とすべく今回第一回目を企画してセイコーエプソングループのご協力をえて発行の運びと成りました。

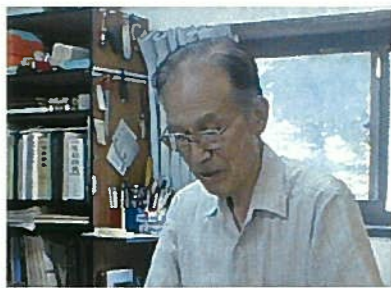
この会報が中南信支部の会員の皆様になんらかの上田高校の同窓会のスピリットを感じさせる絆となり、青春時代に共有した学び舎の思い出を持つ会員の情報交換の場となり、輪が広がれば幸いです。

### 題字について

題字は南安曇在住の松岡翠風（仁太郎）さん（三九期）にご協力いただき、篆刻にて「上田高等学校同窓会 中南信支部会報」と制作いただきました。

事務局記

「思い出の中学生時代と老境と」  
松岡 翠風（仁太郎）さん（篆刻家） 三九期



五十余年に亙る東京での生活を終えて、生れ故郷であり、墳墓の地でもあるあづみ野へ還つて来ました。そして、中南信支部の皆様方のお仲間入りをさせて頂くことが出来ました。顧りみますと、終戦直後の困窮の生活を乗り切り、戦後復興期の強烈な競争社会に身も心もひしがれ、右往左往しているうちに高度成長期、そしてバブルの崩壊、呆然自失して吾に返つてみると、何と戦後五十年を経て、私は古稀を迎えておりました。ごつた返す人間の渦、濁りきった空気、きたない飲料水、そんな東京に何も恋々として住んでいる必要がありません。私は、これも古稀を迎えた老妻を伴って、あづみ野へ還つてきたのであります。

私の人生の過去の思い出に、戦後の諸々は忘却の彼方に押しやり、光輝く一頁があります。それは上田中学生であった時代です。父の職業の関係で、小諸に移り住み、あこがれの上中に入學、小諸から通學しておりました。私は太郎山を背景に見上げる、古ぼけた上田城の城郭の、くずれかけた崖の下の道なき道を、或は宵待草の華やかに哀れな姿で乱れ咲く千曲川の河川敷を、青春を憶い、また限らない寂寥に心をゆだねねらさまよい歩くのが好きでした。

上田と共に小諸もまた忘れられない中学生時代の思い出の地です。小諸は、懐古園の深い谷間の細道を歩いて千曲川に出て、その水辺をあてもなく歩くのが好きでした。そんな時、心は詩情で一杯、人生に対する悩みや疑問など何もなく、唯々自然に溶け込む自己を感じている自分であったようです。上田も小諸も、幼い青春時代の心のときめきの地です。そして今、あづみ野に老いた身を横たへる私にとっては、何物にも替え難い、ほのかなたのしい中学生時代の思い出です。

私は、東京での現役時代から習い覚え、励み、努力した篆刻の道で、今は独自の境地を開拓、新たな作風を確立し、篆刻家として一家を成すに到っております。山紫水明、日本の田園風景の原点と絶賛されるあづみ野に居住し、篆刻会を主宰し、公募展の審査員をつとめ乍ら、日夜自己の芸術の向上を計って、作品の制作に努力している私は、今の処、恵まれた老後であると思っております。しかしそれは目の前の今の現実であつて、何かにつけ思い出すことは、小諸に居住し、上田中学に通っていた少年時代のことでもです。そしてそれらは、動画にも、パソコンにもケイタイにも無関係な、喜寿を迎えた老人の感傷以外の何ものでもありません。誠に可笑い草。

真道 茂さん（彫刻家） 五四期



私の高校三年間は、松尾高校美術学部に通つていたと云つても過言ではない。ひまさえあればデッサンと絵を描いていた。小林三郎先生に「この学校の授業をまともに出ていたら芸大へは入れない。いらない授業はサボレ」と云われ、なるべく直接受験に関係のない授業は欠席して石膏デッサンに明けくれた。修学旅行まで行かずに絵を描いた。

将来の不安もあったが、私にとって画家や彫刻家になる夢の方が大きかった。三郎先生は学校や自宅で、芸術家に大切な心構えや様々な芸術家の話を何度となく、楽しく聞かせてくれた。酒まで飲ませてくれた。ある時、林幸四郎先生（美術担当、風紀係）が突然、三郎先生をたづねて来た。私と三郎先生の前にオチョコが一つづつ置いてあつたが、オトガメはなかった。林先生も三郎先生には頭が上がらなかつた。本当にうれしかった。

後年、ヨーロッパに渡り、世界各国を代表する彫刻家や芸術大学の教授とシンポジウムや展覧会で一緒に仕事をすることが数多く持つてきた。しかし、高校時代の小林三郎先生、芸大での石井鶴三教授、この二人の芸術教育者に優る人物には、ついで、おめにかかることはなかった。その意味でも、あ得多感な時代、またとない二人の芸術の先輩に出会えたことは、私の財産であり、私の人生にとって、最高の至福と感謝している。

青嵐の頃  
石田（旧姓 柳澤）益雄さん（道祖神研究家） 五四期



懐かしく思い出される歳月が流れて行つた。「古城の門」を潜つたあの春、百姓だった父は似合わぬ酒造会社の常務職を引受け、間もなく病床に着いた。大勢の兄弟の末子の私は、大受験は諦め受験勉強に背を向けて、開き直りの高校生活を展開した。その一つが図書委員に居座つたこと。当時、生徒会の委員は半年毎に改選の規約だった。「図書委員は再選を妨げない」の改正提案に誰も異論を挟まなかつた。司書室の一隅に陣取つての活動は、しかし、楽な訳では無かつた。

図書館報「明窓」の編集に追われた。毎号の表紙は、「サブチャン」こと小林三郎先生の絵。彫塑の指導中に同うと「あの像の顔を見る、造つてる人にそっくりだ。始めはそんなもんだなあ。」先生の筆先では、小雨にけむる紫陽花が、ひとつまた一つ咲いて匂う。特集「書評鼎談」は新刊書を、先生と読書好きの生徒、委員の三者が評論する。委員として苦心の末に一文を書きあげ、「文学（者）気取り」こと矢島利房先生に校閲を頂くが、「一言「だめ」。締まり期限までは何回書き直しても「よし」にはならなかつた。挿し絵だけは思うままに描いた。



上田高校校門風景 武村洋治さん画（58期）

小瀬（旧姓 飯島）澄子さん（主婦） 六五期



諏訪清陵高校から転校した私を温く迎えてくれた上田高校を卒業し、三十年余が過ぎました。教職の夫と共に、三人の子育てをしながら県内を転々とし、今は、諏訪尾玉の山を、終の住処と決めようとしています。

現在、楽器を教え、学童クラブ指導員をしながら、時間にも多少余裕があるため民生児童委員を引き受けております。経験及び人格共に不足している私には、相談に乗ってさしあげるより、一緒に悩むことの方が多くことは、言わずもがな。介護問題や子育てに関わる不安など、このところマスコミでも取沙汰されることがおおくなりしました。

核家族の子育てに悩む若い母、老いた親の介護に途方にくれる独身の息子、他人事のように思っていた私に容赦なく世の中を見せてくれました。学習、学習の毎日です。人はだれも充実した一生を終えたいと願ひ、そのための年輪を刻みます。法律や制度も年々整えられてゆきます。

と、数少ない若者は多くの高齢者を抱え、もつと数少ない子供たちは、その数少ない若者を抱えるのです。雪かき、草取り、諸々、法律や制度だけで処理仕切れないでしょう。こんな地域に、充実した一生の締め括りとバラ色の夢を求めるとしたら、大切な次代を支えてくれる豊かな心ある子供たちを育てることがよろしいし、それならば、豊かな心ある大人であるべしを心掛けるのがよろしいと思うこの頃です。

級友が生徒会長になると、書記を頼まれた。受験が射程距離に入らなかつた。誰だって役員など引受けたく無いのだが。文化祭では学年を代表しての演劇もまた。出物は、かの「修善寺物語」。能面打ちの名人夜叉王の婿、春彦役。教員と生徒のなごみ、某さんとの夫婦役も役得だったか。友達が忙しい間、誰も嫌がるいんな役を引受けた。考えてみれば、そのひとつ一つが良い経験になった。卒業して四十五年が経つ。何とか大学を卒て、県上級職員の栄進の道も早々に辞し、転向して一介の教師を退いた今も、共に「俺達はアウトローなさ」と笑い合える学友がある。「我に至剛の誇りあり」と校歌は今も教えている。

# 校門は青春の原風景!

上田高校100周年記念式典・祝賀会に参加して...

武村洋治さん (58期)

創立100周年記念式典・祝賀会に中沢副支部長と私の二人で支部代表として出席しました。10月7日(土)式典は市民会館で在校生と一緒に、祝賀会は休憩を挟んで上田高校体育館に1000名近い同窓生を集めておこなわれました。

式典は「上田高校100年の歩み」のビデオ上映、知事の祝辞など歴史と伝統を感じられるプログラムで行われ、祝賀会も100年の記念ということでいつもより参加者が多く、いつものように和やかな雰囲気の中で行われました。

その中で特に印象に残ったのは会が終わった後の校門前の様子でした。

大勢の同窓生が立ち止まり、集まり、挨拶を交わし、次から次へと記念撮影をする様子が祝賀会の第2会場のような様子でした。

昔のままの堀と校門とその周辺の大木の緑とで作る風景がわれわれの青春の熱い思い出の数々を湧きおこすのでしょうか。楽しい1日を過ごすことができました。



## 平成12年度 中南信支部総会のご案内

下記の要領にて、平成12年度 上田高等学校同窓会 中南信支部総会を開催致しますので、万障お繰り合わせの上、ご出席いただければ幸いです。同封いたしましたハガキにご出席の有無、ご近況をお書き添えいただき、返信下さい。何卒よろしくお願ひ致します。

記

と き 平成12年11月23日(木) 勤労感謝の日

第一部 総会 午後2時30分から3時

講演 午後3時から4時

「日本のグローバル化はなるか —海外生活の経験より—

講演者 石井光春 氏 (54期) 住商リース株式会社 社長

東京大学法学部卒業、住友商事入社、アメリカ・中国に15年間勤務、住友商事専務取締役を経て1999年より現職

第二部 懇親会 午後4時から

ところ 松本東急イン 〒390-0815 松本市深志1-3-21

電話 0263-36-0109

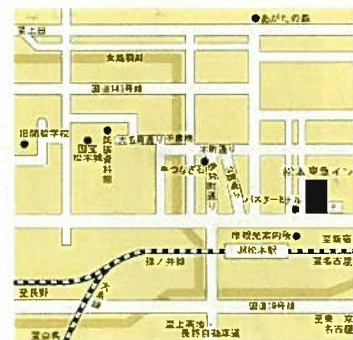
会 費 8,500円(通信費含む)

連絡先 久保田 信二(中南信支部 幹事長)

松本市中山台11-14 電話0263-85-1599

伊藤 清志(中南信支部 幹事)

E-mail アドレス ito.kiyoshi@exc.epson.co.jp



## 平成11年度総会の様子

平成11年10月16日に松本市 東急インにて開催されました。細川校長先生(当時)をはじめとする来賓の皆様をはじめ43名のご出席のもと、和やかな雰囲気の総会となりました。信大医学部の小池先生(67期)と道祖神研究をされている石田さん(54期)からご講演をいただきました。



編集後記 次回以降、年1回の発行、会員の皆様のご近況報告等々、紙面の充実を図って参りますので、よろしくお願ひ致します。(事務局記)